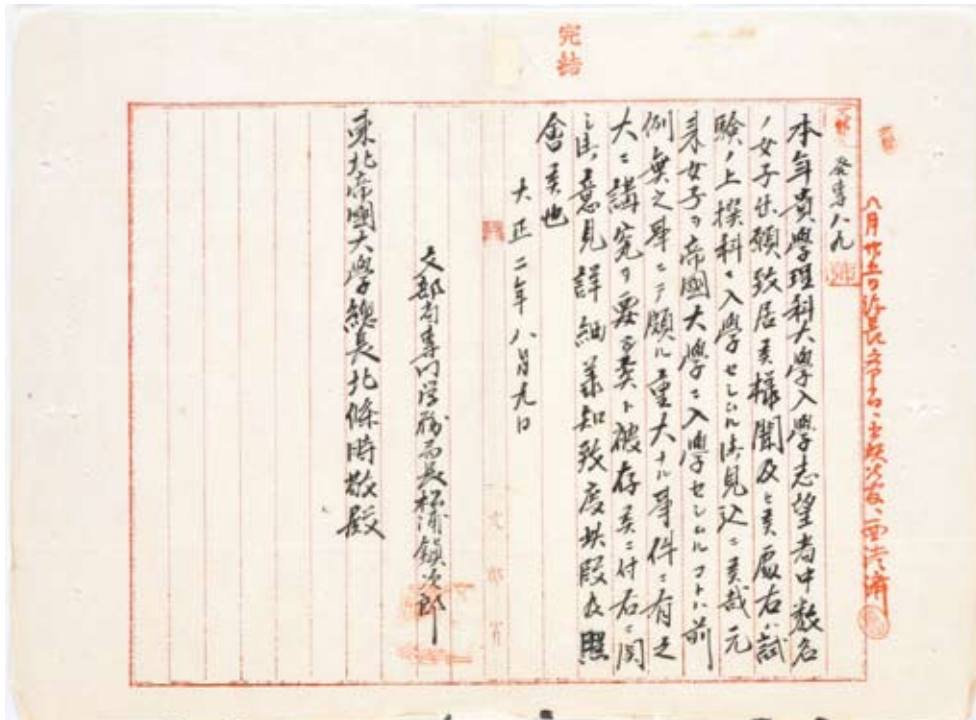


TOHOKU UNIVERSITY ARCHIVES NEWSLETTER

Index

- 2 自校史教育の意義と基盤
—二つの大学での経験から—
安達宏昭 (文学研究科准教授)
- 4 資料の公開について
- 6 企画展「教養」のゆくえ
—東北大学教養部の模索—より
- 7 史料館のうごき
- 8 お知らせ

女性の東北帝国大学受験をめぐる
文部省専門学務局長の照会
(大正二年八月九日)



「再発見」された公文書 — 「女子入学」をめぐる照会状 —

東北大学がわが国初の「女性学士」を生んだ大学であることは、この「たより」の読者の方々もご存じかもしれません。その際の大学と文部省のやりとりを示す、大正2年(1913)8月9日付の1枚の文書が、史料館に遺されています。東北帝国大学に数名の女性が出願したことを耳にした文部省が、「女子を帝国大学に入学させることは前例のない重大な問題なので大いに講究する必要がある」と述べこの件についての大学側の意見を質したものです。右の欄外には、8月25日に総長が文部省に出頭して文部次官と面談した、と書かれていますが、実は大学は8月8日から12日にかけて入学試験を行っており、8月15日にはそのまま3名の女性の合格を発表してしまいました。総長の「出頭」は、どうやら「事後報告」のためだったようです。

草創期東北大学の「したたかさ」を物語るこの文書、必ずしもずっと大切に保存されてきたわけではありません。公文書は一般にファイル(簿冊)に綴じられて保存されますが、いろいろ調べていくとこの文書、当初はきちんと綴じられていたが、ある時期におこなわれた文書の「整理」に際し、保存の必要がないものとして、ファイルから外されてしまったようです。今日私たちがこの書類を見ることができるのは、ある職員が、事務机の中に無造作にしまい込まれたこの書類を偶然「発見」してからのようです。

女性の大学進学が常識となった時代、この文書は大学行政の実務の上ではほとんど意味を持たないものです。ファイルから外されたのも、おそらくそうした考えによるのでしょう。しかし一方でこの書類は、東北大学が大切にしてきた「門戸開放」という自意識を支える物証のひとつとして、いまの時代にも力を与えつづけています。

自校史教育の意義と基盤 —二つの大学での経験から—

文学研究科准教授

安達宏昭



近年、「自校史教育」といわれる取り組みが盛んになってきています。自らの大学の歴史を講義内容とする科目を、設置する大学が増えてきているのです。東北大学でも、昨年度から全学教育科目（カレントトピックス科目群）に、「歴史のなかの東北大学」という科目が設けられました。キャンパス史跡散策、学都仙台の形成、東北帝国大学の創設と拡充、戦前の学生生活や女子学生・留学生の受け入れ、戦後大学改革と新制東北大学の出発、川内・青葉山キャンパスの誕生などの内容を、史料館、百年史編纂室、高等教育開発推進センター、文学研究科等の教員が、それぞれ一回から数回にわたって担当しています。私も戦時期を担当し、学徒出陣や学徒勤労働員等の実態を講義しました。

また、私は出身大学である立教大学において、「立教学院と戦争」（全学共通カリキュラム）という講義の一回分も担当しています。この講義は、立教学院史資料センターの研究プロジェクト1「立教学院と戦争に関する基礎的研究」が母体となって、2003年度から開設されたものです。私は「戦時動員体制と立教中学校」というテーマで、大学とは異なる戦時下の中学校について講義をしております。

このように実際に自校史教育に携わったことは、その教育的な意義について考える機会となりました。そして、これまで自校史教育については「初年次教育」や大学の個性化とアイデンティティーの共有などの観点から検討されることが多かったのですが、学生の反応や感想に接するなかで、私は歴史教育の観点からも、重要な意義を持っていると考えるようになりました。

概論など一般の歴史の講義では、必ず学生にこれまで持っていた歴史のイメージを聴くようにしていますが、そこでは、現実感がわかないものとか、自分とは特に関係しないものという反応がかえってくるのが少なくありません。それゆえ、講義ではそうしたイメージを修正するように内容を考えて提示していくのですが、自校史教育の内容はそれと同じような効果があるように思います。私が担当する戦時下の学校生活について具体的に学ぶと、学生の多くは、現在との違いに驚きます。そして、自分を取り巻く環境が学問をする上でとても恵まれたものであることに気がついたという感想や、志半ばで戦場に赴かなければならなかった学生の心情に想いを寄せる感想が出てきます。さらに、平和への努力をする必要を感じたとか、自分も大学の歴史を作っている一人である

「歴史のなかの東北大学」の内容(2008年度) ※カッコ内は担当教員名

キャンパス史跡散策（片平キャンパスと史料館見学）	東北帝国大学の学生生活	(柳原敏昭)
大学の歴史—東北大学について学ぶ前に—（羽田貴史）	「門戸開放」の学生史—女子学生と留学生—	(永田英明)
東北大学誕生前夜—学都仙台の学生たち（永田英明）	戦時下の東北大学	(安達宏昭)
東北帝国大学の誕生（中川 学）	戦後改革と新制東北大学の誕生	(羽田貴史)
附置研究所の誕生（中川 学）	川内・青葉山キャンパスの誕生と東北大学の未来	(羽田貴史)
総合大学としての確立—法文学部設置と図書館（曾根原理）		

ことがわかったという感想もありました。

これらの感想からわかることは、学生たちが当時の状況を、リアリティーをもって理解したり、自分の存在に関わらせて捉えたりしているということです。自分が所属する大学という組織に起こったこと、そして同年代の人々が経験した出来事については、より身近なこととして、想像力を働かせて、具体的に理解しやすいのでしょう。こうした認識は、歴史的な存在としての自己に気づかせ、歴史形成の主体意識にもつながっていくと考えられます。それゆえ自校史教育は、学生たちに歴史において人間の確かな存在を感じさせるとともに、歴史から現在を考える視点を提供できる場だと思うのです。

また、担当して改めて感じたことは、自校史教育の内容は、その大学の歴史に対する学問的研究の成果を基盤にしなければならず、その研究は継続的に行なわれる必要があるということです。あわせて、その研究環境を整えるために、大学関連史料の収集・保存整備が、きわめて重要であるということです。東北大学では、『東北大学百年史』の編纂や『東北大学史料館紀要』に発表された研究などが基盤になっていますし、立教大学では、『立教学院一二五年史』編纂とそれに続く立教学院史資料センターの設置、『立教学院史研究』の発刊、共同研究の進展という一連の流れの中で開講されたものです。「立教学院と戦争」の共同研究では、当時の『理事会記録』、学長の『日誌』、『官公往復書類』、経営母体である母教会（米国聖公会）と宣教師関係の諸資料など、国内だけでなくアメリカ・中国・韓国に及ぶ調査により収集した第一次史料や聞き取りに基づいて、実証的に検討を行いました。そして、老川慶喜・前田一男編『ミッション・スクールと戦争—立教学院のディレンマ』（東信堂、2008年）という11名が執筆した約500頁の論文集を刊行しました。戦時下という大学の歴史では短い時期を対象としているにもかかわらず、半期にわたる講義が成り立つのは、このように可能な限り資料を渉猟し収集して、様々な角度から研究したからにほかならないと思います。

学問的研究においては、当時の大学の問題点を明らかにして分析することもあります。そのような研究成果についても、立教大学での講義の経験から、自校史教育で取り上げるべきだと考えています。立教大学での共同研究では、戦時期の立教学院が従来おもに「被害」者的な視点から描かれていたことに対して、国策に迎合した側面や留学生などの視点から「加害」の側面も遡上にあげられ再検討されました。また、学院寄附行為における設立の目的を「基督教主義ニヨル教育」から「皇国ノ道ニヨル教育」に変更し、立教大学の学則第1条から「基督教主義ニ基ク」を削除したことが、その経緯や要因から詳しく分析されました。

講義では、こうした研究内容が学生たちにそのまま提示されています。それを学んだ学生たちは、問題点を見つめるからこそ今後のことをしっかり考えられると前向きにとらえ、これからは活かす道をともに考えてくれました。このような学生の反応は、実証的な研究を基礎とすることに確信を持たせてくれるものでした。問題点を避けてしまえば、単なる顕彰や宣伝に陥ってしまい、やがて学生もそのことを見抜き、自校史教育が持つ様々な意義は失われていくことになるでしょう。大学が歩んできた歴史を、できる限り客観的かつ総体的に学生に提示し、そこからともに考えることが大切だと思うのです。

立教大学では、自校史教育には、もう一つ「立教大学の歴史」という科目があります。この講義では、立教学院史資料センター編『立教大学の歴史』が教科書として配布されています。A5版265頁でソフトカバーのこの本は、写真、表、史料も盛り込まれ、学生に好評のようです。東北大学の自校史教育でも、『東北大学百年史』をふまえたテキストの作成を考える時期に来ていると思います。このことも含めて、東北大学において自校史教育を発展的に展開していくためには、さらなる研究や教育方法の検討が必要でしょう。そのためにも、史料館の働きと百年史編纂の経験は、今後ますます重要なものとして注目すべきだと思います。

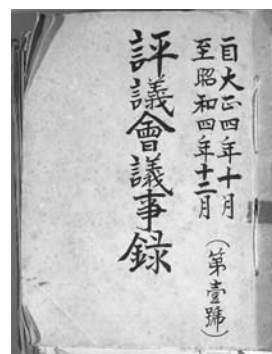
資料の公開について

史料館では、公開準備が完了した資料の目録を順次ホームページ上で公開しています。平成20年（2008）11月から21年3月までの間に目録を公開する主な文書は、以下の通りです。これらの資料目録は、当館ホームページ（<http://www.archives.tohoku.ac.jp/>）の「東北大学歴史的公文書データベース」および「個人・関連団体文書目録」より入手することができます。

●移管法人文書

評議会議事録（1945年以前分）…件名データベースも公開

「評議会」は2004年（平成16）4月の「国立大学法人東北大学」発足まで存在した学内行政の最高意思決定機関。帝国大学の評議会はもと「帝国大学令」（1886年）に基づく総長の諮問機関として設置されたものだが、「大学自治」の確立に伴い事実上各大学の意思決定機関としての役割を戦前から果たしてきた。東北大学では医科大学が開設された1915年（大正4）に発足し、戦後も新制東北大学の最高意思決定機関としてその役割を果たし続けた。東北大学の歴史に残る数多くの重要事項がこの場において審議されており、議事録には、東北大学100年の様々な決断・意思が凝集されている。



評議会議事録は現在、作成後30年を経過した時点で歴史的公文書として史料館に移管されることとなっており、現在昭和53年度までの議事録が史料館に移管されている。史料館ではこれらについて内容確認とデータ登録作業を行い、作業が完了したものから順次公開するが、今回はその第一弾として、大正4年から昭和20年までの議事録を公開した。公開に際しては、毎回の会議での議題や配付資料名に関するデータを含む件名レベルの情報を「東北大学歴史的公文書データベース」に登録しており、Web上でこれらの情報を検索することが可能である。なお戦後分についても準備が整い次第公開する予定である。

設置認可申請書関係書類 106点

戦後の新制東北大学発足時およびそれ以後における、東北大学および学部・学科等の設置認可に関する文部省への提出及びその認可文書。戦後の学制改革に伴う新制東北大学の設置に際しては、旧制高校・専門学校や師範学校との合併構想の変遷などに伴い数次にわたって設置認可申請が提出されており、状況の推移に応じた計画の諸段階を追うことができる。その他戦後に於ける学部・学科や併設学校等の設置・整備をめぐる計画等を跡づけることができ、戦後東北大学の組織変遷に関する基礎資料となるものである。



新制東北大学の設置
許可申請書（修正版）

●個人資料

畑井新喜司関係資料 21点

理学部生物学科の初代教授・畑井新喜司の関係資料。2008年12月に御遺族より寄贈された。畑井に関する文献等が主であるが、その中で特に興味深いのが、畑井の没後その功績を記念して太平洋学術協会（PSA）により創設された、「畑井メダル」の原型。彫刻家の安田周三郎の手になる作品。メダルは畑井が生前に深く関わっていた「太平洋学術会議」において、太平洋海洋生物学研究に優れた業績を残した研究者に授与されている。



畑井メダル原型（表一裏）

大久保準三文書 187点

大久保準三（1886-1964）は、本学理学部教授、科学計測研究所初代所長をつとめた物理学者。1914年（大正3）東北帝国大学理科大学の一期生として物理学科を卒業。講師・助教授をへて1923年（大正12）から本多光太郎の後任として物理学科教授となる。在任中理学部の金工場・木工場の整備拡充につとめ計測方法の開発研究の重要性を主張し、東北帝国大学科学計測研究所の創設に尽力。1943年（昭和18）その初代所長となり、1948年まで在職した。資料は旧科学計測研究所に保管されていたもので、大久保の手許文書の一部が退任後研究所に残され、「記念資料」として引き継がれてきたものと思われる。内容は科学計測研究所の創設に関する図面が中心であるが、日本学術振興会関係、戦時下の東北帝大における科学研究費申請に関する文書なども興味深い。



野口明関係文書 28点



野口明（1895～1979）は、旧制第二高等学校第10代校長をつとめた教育者。1916年（大正5年）に第二高等学校を卒業後、文部省、宮内省等を経て1943年（昭和18）に二高校長に就任。戦時体制への対応、空襲被災と戦後復興、新学制への移行といった課題に対処し、新学制への移行を節目に新制お茶の水女子大学の初代学長に転出した。

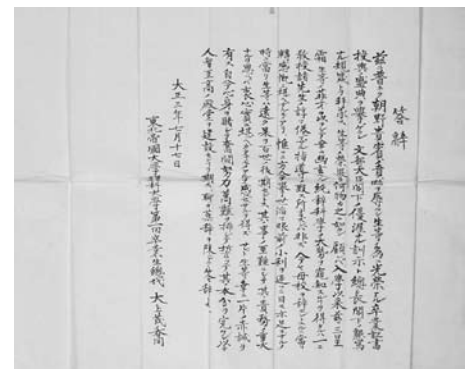
資料は知人から野口に宛てた書簡を中心とするもので、全体の3分の2程度が二高校長をつとめた戦中および敗戦直後の時期のもの。差出者には薄田美朝・河井彌八・唐沢俊樹・松平康昌・藤井種太郎・本多猶一郎等の内務省や宮内省・宮中グループ関係者、瀧川亀太郎（二高教授）・渋沢敬三（大蔵大臣、民俗学者）・住谷悦治（同大教授）等の二高関係者、野口と同時期の三高校長落合太郎、東北帝大の河野與一・三宅剛一など、野口の履歴を反映する豪華なメンバーが名を連ねている。



河野與一書簡

西谷（大上）茂喬関係資料 21点

西谷（大上）茂喬（1880-1957）は、東北帝国大学理科大学の第一回卒業生で、佐賀大学教授などをつとめた数学者・数学教育者。東京高等師範学校卒業後中学校教諭を経て31歳のとき東北帝国大学理科大学に入学。卒業式では総代として答辞を読んでいる。資料は、(1) 東北帝国大学時代の講義受講ノート、(2) 第一回卒業証書授与式に於ける答辞文（写真）、(3) 昭和6～8年の英国留学時代を含む佐賀高教授時代の備忘ノート、(4) 著書、(5) 卒業記念品としての酒器一式、などからなり、なかでも(1)は開学当時の東北帝国大学理科大学での教育内容を知ることができる貴重な資料であり、(2)もまた第一回卒業式の関係資料として貴重なもの。



東北帝国大学理科大学第1回卒業式学生総代答辞

企画展 「教養」のゆくえ —東北大学教養部の模索—より

会期 10月3日（金）～11月30日（日）

東北大学で教養部が廃止されて15年になります。今回の展示は、特に教養部を知らない世代に教養部の記憶を伝えるために企画しました。展示の前に大学院国際文化研究科が保管していた教養部関係の文書が史料館に移管され、展示を充実させることができました。

展示会期中にかつて教養部であった川内北キャンパスの旧武道館が取り壊されましたが、その工事現場で発見された看板が寄贈されました。表には「東北大学教…」の文字があり、背面には「昭和三十九年四月一日」と書かれています。昭和39年4月は、教養部が官制化され正式に設置された時です。会期後半、展示に加えしました。



史料館の建物はもとは図書館でした。その当時の閲覧機を利用して、資料閲覧コーナーを設けました。教養部の学生便覧や、古代から現代までの川内の変遷を記した『川内のしおり』等を用意しました。

音声資料コーナーでは、下記の教養部教授の最終講義音声を御遺族の了承をいただきその一部を電子化して公開しました。史料館で全体をお聴きいただくこともできます。

扇畑忠雄教授 「古代文芸における詩的形象」	昭和49年
永野為武教授 「七つのなぞ」	昭和49年
阿刀田研二教授 「楽しい生物学」	昭和50年

会期中、来場者は912名、試行として、土日祝日開館を行いました。来場者数も増加しましたが、これまで平日には来場できなかった方たちに御覧いただけたことが重要であったと思います。

今回は比較的新しい年代の資料が多かったので、「これが、もう歴史になってしまうのか?」という御感想とともに「現状について知りたいのだが、史料館ではだめなのか?」といった御意見・御要望をいただきました。現在に連続する歴史を展示することの難しさを再認識した次第です。（大原理恵）

公開講演 帰らざる青春 —教養部の光と影—

東北大学名誉教授
渡部 治 雄

平成20年10月25日（土）

今回が初めての試みとなりましたが、企画展示関連事業として、史料館建物内部の法科大学院講義室を会場に、公開講演会を開催しました。「影」としての教養部発足の歴史的経緯、富沢分校時代の教官と学生のふれあいという「光」、大学紛争、そして東北大学における教養部廃止の過程についてお話いただきました。



また現在の教養教育のあり方や大学史の記述についての御提言もいただきました。講演の全容は『東北大学史料館紀要』第4号に掲載しますので、御覧下さい。

今後も、講演会を行っていく予定です。（大原理恵）

史料館のうごき（2008.10～2009.3）

○平成20年度の法人文書移管作業を行いました

平成19年度末に保存期間を満了した本部その他の部局の法人文書に対する評価選別作業の結果、合計121点の文書を新たに史料館へ引継ぎました。これらについては、すでに移管されている他の文書とともに内容等に関する点検調査を行い、その後閲覧に供する予定です。

○旧教養部文書が移管されました

上記の移管文書と別に、これまで国際文化研究科事務部で保管されてきた、旧教養部の事務文書（計154冊）が史料館に一括移管されました。教授会、運営委員会等の議事録や教養部改革関係の委員会資料など、戦後新制大学の象徴的存在として発足した教養部の誕生から終焉に至るまでの軌跡を記録した基本資料です。これらについても今後内容等に関する点検調査を経て、閲覧に供する予定です。



○平成20年度東北大学初任者研修「東北大学の歴史」講義

10月1日採用の東北大学新規採用者初任者研修に際し、永田助教が「東北大学の歴史」に関する講義を行いました。初任者研修での大学史の講義は2007年（平成19）から行われているもので、これからの東北大学の歴史を支えていく職員にむけ、東北大学設立の理念や、戦前・戦後の大学が直面してきた様々な課題をとりあげ解説をおこないました。

○新収・新公開資料展示コーナー

2008年12月より、展示室内の新公開資料展示コーナーで（1）科学計測研究所関係文書（「昭和二十年防空日誌」「東北大学科学計測研究所拡充五年計画（昭和26）」など）、（2）畑井新喜司関係資料（理学部生物学科初代教授。「畑井メダル」の原型ほか、最近御遺族から受贈した資料）を展示紹介しました。

○「学徒出陣」体験者への聞き取り調査

1月13日（火）、昭和18年秋の「学徒出陣」体験者である本学卒業生、遠藤榮一氏（宮城教育大学名誉教授）への聞き取り調査を、宮城学院女子大学大平聡教授および大学院生の方の協力により実施しました。戦時色が徐々に深まり、やがて学徒兵として学窓を離れていく時期、そして戦争を終え新しい時代を迎えた時期の学徒としての思い、経験などを語っていただきました。調査の内容は後日別の形でご紹介する予定です。

○「星寮のおひなさま」展を開催しました

2006年より行っております、昭和初期以来、看護婦寮「星寮」や大学病院で多くの人々の目と心を慰めてきた「星寮のおひなさま」展を、今年も2月17日から3月14日まで開催しました。

○国立公文書館 公文書館実務担当者研究会議への参加

2009年1月27日から29日まで国立公文書館に於いて開催された「公文書館実務担当者研究会議」に、当館からも1名が参加いたしました。今年度は「公文書館の公開制度の現状と課題」というテーマで、「文書管理法」制定以後の公開制度のあり方などについて研究発表やディスカッションが行われました。

○展示図録を製作しています

現在、史料館の常設展示の内容をまとめた展示図録の制作を行っています。東北大学や学生の歴史をまとめた「歴史のなかの東北大学」と、仙台医学専門学校留学時代の魯迅に関する「魯迅と東北大学－歴史の中の留学生」（中国語版は「魯迅和東北大学－动荡历史中的留学生－」）の2冊を制作する予定で、新年度には販売を開始する予定です。ご期待ください

学生の
皆さん
へ

大学の歴史を学ぶ

—全学教育「発見！東北大学 その歴史と未来」—

平成19年度より、全学教育科目（展開科目カレントトピックス科目群）の一環として、東北大学の歴史に関する授業科目（歴史のなかの東北大学）が開講されています（本号2～3ページ参照）。この科目は、東北大学で学ぶ学生の皆さんが、大学や学生の歴史を知ることを通じて、東北大学という場で学生生活を送ることの意味を考えるきっかけとしてもらうことをねらいとしています。

授業は複数の教員によるリレー式の講義で、一回ごとに異なるテーマの講義を聴くことができます。また史料館の展示や片平キャンパス等の史跡をめぐる見学会も実施しています。授業には、一年生を中心としつつも卒業を控えた四年生や外国からの留学生など様々な学生たちが、それぞれの関心に基づいて参加しています。

平成21年度は、「発見！東北大学—その歴史と未来—」と題し、従来の内容に加えて、野家啓一本学理事による特別講義もおこなわれる予定です。東北大学でまなぶ学生のみなさん、歴史のなかに隠れている、あなたの知らない東北大学を発見してみませんか。詳しくは下記のWebサイトをご参照ください。

<http://www.archives.tohoku.ac.jp/kogi/gaiyo2.htm>



常設展示 歴史のなかの東北大学

史料館で公開している常設展示「歴史のなかの東北大学」では、キャンパスの今昔の風景、戦前・戦後の学生生活、東北大学で活躍した学者たちの営み、女子学生や留学生たちの様子など、さまざまなテーマから在りし日の大学の姿に迫ることができます。動画や音声などのコーナーもあり、また戦後東北大学に包摂された学校についても、写真パネルや資料で紹介しています。ぜひ一度、おいでください。

～資料の収集にご協力をお願いします～

東北大学で活躍した教職員、東北大学で青春を過ごした学生たちの歴史を豊かに伝える「東北大学校友アーカイブズ」の構築のため、当館ではかつて本学にご在学、ご在職された方々、その他本学にゆかりのある方々に、お手許にある本学の歴史や学生生活に関わる資料のご提供をお願いしております。ご協力いただける方は、当館までご連絡をお願いいたします。

収集資料の例 本学での学生生活に関わる資料（各種学生団体の記録や印刷物、学生服・制帽など）
本学での教育研究活動に関わる資料（講義ノート、大学運営に関する各種の記録など）
本学に関する映像資料（写真、ビデオテープ、その他）

東北大学史料館だより 第10号 2009年3月1日発行

編集・発行 東北大学学術資源研究公開センター史料館

〒980-8577 仙台市青葉区片平2-1-1 tel 022 (217) 5040

E-mail kinen1@mail.tains.tohoku.ac.jp URL <http://www.archives.tohoku.ac.jp/>